

抄 録

第28回群馬整形外科研究会

日 時：平成 27 年 9 月 19 日 (土)
場 所：群馬大学医学部内刀城会館
代表世話人：高岸 憲二 (群馬大院・医・整形外科)

〈主題 I〉 術後フォローを経て判明してきた 各部位人工股関節・人工骨頭の問題 点について

座長：田中 宏志 (伊勢崎市民病院 整形外科)

1. 人工股関節置換術後における関節摺動面の摩耗に伴う 問題点について

佐藤 貴久, 小林 敏彦, 本田 哲
米山 友貴, 信太 晃祐, 原 和比古
松原 圭介, 小野 庫史

(公立富岡総合病院 整形外科)

人工股関節置換術 (THA) での長期成績に影響する因子として、関節摺動面の摩耗に伴う合併症が挙げられる。Metal on Polyethylene 型 THA であれば、ポリエチレン摩耗による、osteolysis や loosening が、Metal on Metal 型 THA であれば、metal debris や head-neck junction の corrosion による Adverse Reaction to Metal Debris (ARMD) が問題となっている。

Osteolysis や loosening 症例では、疼痛を伴うことは少なく患者側からの手術希望はほとんどないため、術後経過において再置換術の時機を逸すると広範囲な骨欠損を生じ、再置換術を行う際、しばしば治療に難渋することになる。したがって定期的な外来受診時にレントゲン上、osteolysis が疑われる際には、CT 撮影やトモシンセスによる断層撮影を行うことで、骨欠損の部位や範囲がより把握することができる。再置換術の必要性を検討するには、術後の注意深い定期的な経過観察が特に重要である。今回、THA 後短期～中期に起こった osteolysis により、人工股関節再置換術 (revision THA) を施行した 3 症例と、Metal on Metal 型 THA 後 shell が脱転し、revision THA を施行した 1 症例について供覧し、それぞれ治療成績および治療方針について報告する。

2. 大腿骨セメントレスステム抜去の経験

鈴木 隆之, 茂木 智彦, 金澤紗恵子
小林 亮一, 佐藤 直樹, 田中 宏志

(伊勢崎市民病院 整形外科)

【目的】 大腿骨セメントレスステムの抜去は挿入に比して非常に困難である。当院で経験した抜去症例から検討する。【対象】 当院にて抜去を要した大腿骨セメントレスステム 6 例。【検討項目】 抜去原因、ステム固定様式、抜去方法、再置換方法。【結果】 抜去原因：人工骨頭移動 1 例、感染 1 例、人工関節破損 2 例、ステム周囲骨折 2 例。ステム固定様式：近位固定型 5 例、遠位固定型 1 例。抜去方法：大腿骨開窓 2 例、薄刃ノミ刺入 4 例、再置換方法：近位固定型ステム 1 例、ロングステム 5 例。【考察】 遠位固定型ステムの抜去は、特にカラー付きステムは髓腔からの操作だけでは固定部分の目視ができず、かつノミが届かず困難を極める。カラー付きでも近位固定タイプでは、ポラス部分の骨皮質を切除すれば抜去は容易である。カラー無し近位固定型ステムは薄刃ノミの刺入だけで全周性に固定部分の破壊は容易である。【まとめ】 大腿骨セメントレスステム選択では抜去も考慮した機種選択が必要と考える。

3. Adverse reaction to metal debris (ARMD) と思われる 2 例

高嶺 周平, 内田 訓

(サンピエール病院 整形外科)

高岸 憲二 (群馬大院・医・整形外科)

【症例 1】 53 歳女性、右末期股関節症に対し 2009 年 6 月 24 日 metal on metal THA を施行。術後 1 年 7 ヶ月、特に誘引なく右股関節痛出現し単純レントゲンにて右大転子内側に骨溶解像認め、血中コバルト、クロム軽度上昇認め術後 2 年で再置換術施行。病理組織検査では大転子内側の病変は壊死性組織であった。術後 6 ヶ月の Xp, CT にて病変部の拡大は停止。血中コバルト、クロム濃度は正常化し現在軽度の痛み残存あるが ADL は支障ない。【症例 2】 47 歳女性、左末期股関節症に対し 2009 年 8 月 10 日 metal on metal THA を施行。術後 2 年左大腿部の腫瘤に気付き当科を再診。CT, MRI 上、大腿直筋内に偽腫瘍を認めた。好酸球